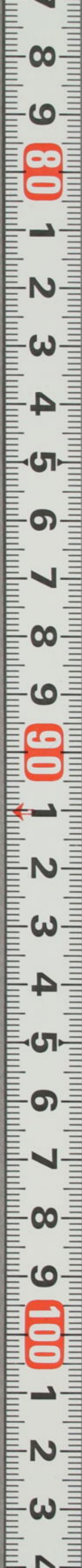


近江縣物語

卷之三

~ 13
3301
3



門へは
兼 3301
巻 3

近江縣物語卷之三

のひをまのりひゆら

橋乃安世ハ近江の國ありて世をやくはと命をかり
ありをひぬすび共數百騎ありておまひ素多れをひと十外
のぐれきんよハ去りてとて妻の手をとりて路もり手前
あつけけくまひをさるるはてもむすの園生ハいふ成
しぬひびとのあまよとくられしに一定せり何れあさ
花乃すざをむくつけき山風のたひてつれゆきも
とありをひとまらふ足もすまびさるハ雨降をうねも
あれもつりあきほくしるる。と海かかまはるるま
すもわしと老くむまあがゆくものどくはちがうあんとて

大正十年八月廿九日
本大泉出版部

あつる男おれを此へ成まへりあもさへおつてかへて
ゆつとぬひびとをさがしつてそのまか思ひやを
かこの松原へ行てちゆく人さまちせせてまらぶ
つゝかましておのれをありましつりひのくを
かそれ持る物中皆すて逃ていねをのぞきぬ
うちよせを頭とりて帰んともやまかんとさう
志おほせし後見あま入ひかんとてあをたて
けり松原へ行て松が根ありちみてなはは盗人の
あふ時サレたふとあふん人けにあは見てびと
ひかきくゆらばあつるあつるあつるあつるあつる
とつらびらちまてとりまてあつるあつるあつるあつる

人をもれおのれいそと刀は多とかけつれどあは立體
けあくとあひひやあつる足ふとあつるあつる
ずいおるにぐい見ね松もせー旅人のだけ高く
たもがたれカこて裾をつるきにかげてのどくと
てらちよあつね乃人も身をびあけまけまゆ
すもども聲さびこくちまてせまきよをれもあ
あつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる
大將軍あつるあつるあつるあつるあつるあつる
くつたがの男あつるあつるあつるあつるあつる
我身へいぬをさつるあつるあつるあつるあつる



いひてあつたればいふかおちわいして吉もよかりなまごどせめて
 聲とあけておしひとさきなりといひくづらひてをると。旅人
 見えくぢにといひいさきありとちちもあはれ。かたてさへあま
 をくぢをがれとさきなりとてあまは武者あひとてけき人
 乃すも事ごとくして旅人ほくそ笑ておのれいひさきつひ
 山をさかんにうらうてくれんずとてかじきねたふりわけら
 る。一膳心もせめてのけがぬ倒すてくぢ起あごらび
 ひひよもあてとつひはく祥しとてんく。蕪物よけひて
 腰くも人もむやくなりとて引かして身のまう。この
 せんさかきにぬすもあやといくもなんなくといふあま
 そのねがたあをびさそへつたの事なり。今よりむぢだる

つごをやめて入道あて命つあまて何れも帯人があま
 かつつとくかあてあつとがきりけい。あはれよらぬそ
 物同類のものりを何れもまた息きんぞつてまぐも
 あらぬ手とつれて見すしびさて。同類のものハ。わ
 ちるあてもおのれさむらのあひか。あておひもあて世とつて
 らんも思ひさらぬさそあま。いひはか。靴まをま
 てうらもいひはく松よりてか。こをわしてを行る。帯人
 うらつを見送り。ただんともまも腰さびをひりて松の
 樹よすりてやうくあらぬさか。のりひえさる。包脊よあひ
 て思ひる人乃頭とまうてこもりひつけさ。いひをさ
 物乃手よいづま。いづらぬ人ものさ。いひ

近江興物記卷三

四

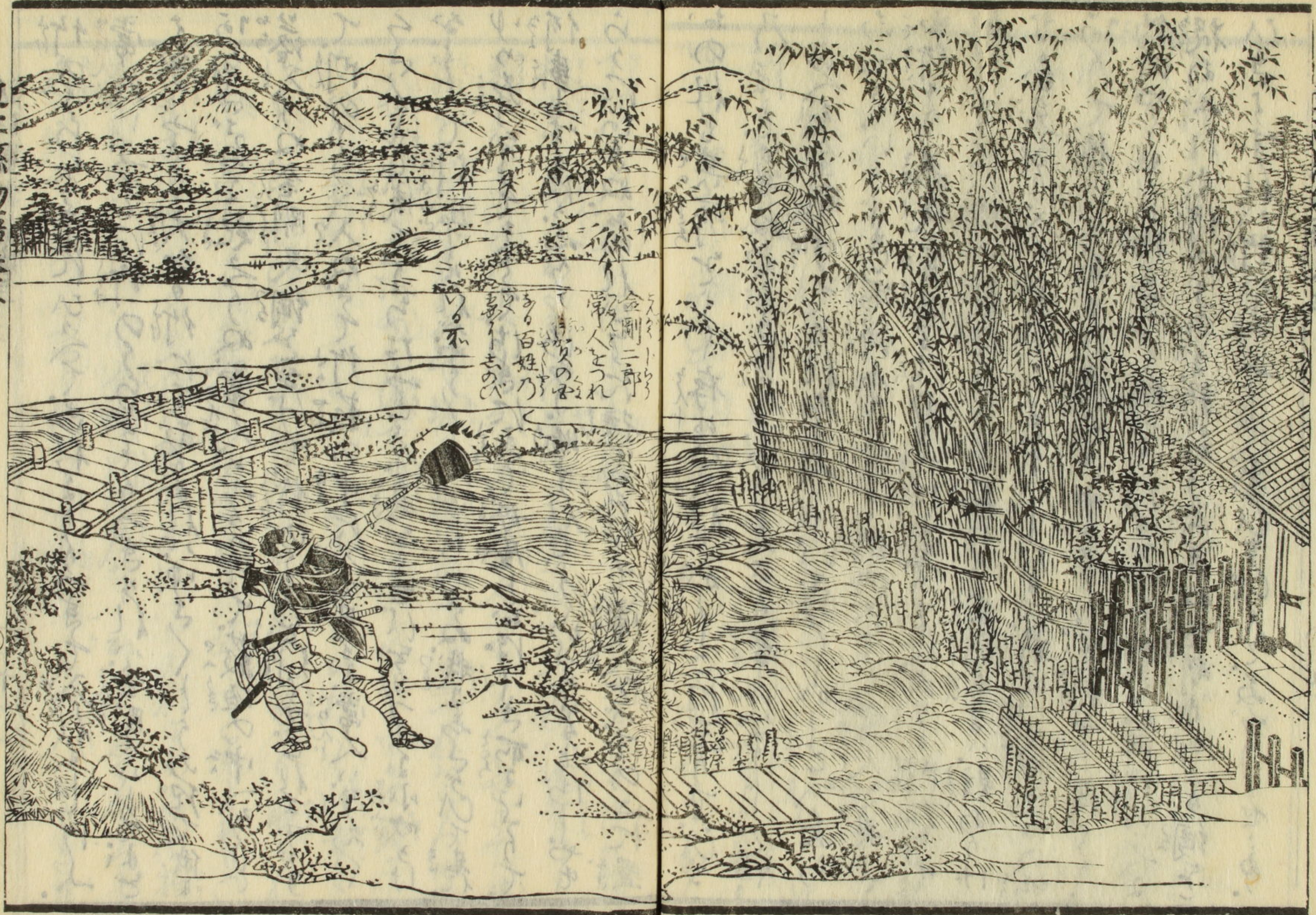
無愁のあれりのをこれ渡幸が士卒の頭ありやとひて
足少く常人がまに踏やとよく見れば女の頭なりま
ら夜月に見えどくおぬ頭をとりてまこれらうし
おりのをまきんもいふたうちあや面あつてはひりれを
調伏丸かよへておのれをひきまされ物すくしてはきまで
包ひき明てなげゆひさうちの病が頭を人の魁へ
見りり膽つがねく例のつがきさひをひき金剛二部
きこれいふにひりておのりあり見ておはばくおのりひ
この旅人なり金剛二部うちあつていふおれを
たらうあまはれのれなくもさる物をとてさけゆらふその
時きこれ我れりりなり常人魂をせく生るもあら

せずおのれが剛膽をとりんとしてかへる人アしがたさう
勝病づきたらやつとハおれをげりとして一度よを
調伏丸のひりりやつとこのひりりかたし陸とを
きたりこのらららのおそれあまらるをて板風呂
乃水かじらるまへ但味方よ入るあまらる例のわく
えうへりひておのり入ぬ盛人も常人が胆をほ
らりて針のさきあて憐れさるおをえりいさすま
はてひきりて湯屋のまににをす名おれらるのりおす
びとのあまらるつぎおれらるをへ行て人すらひま
べきたあまらるおひてまらり目ごたあらの水かじりて
このあまらるいふおれらるのりらとを

〇いもかーら

そ終より常人の如くびとを陣まきりて湯をたいて目を
 さらしおろす。金剛二島しりし者いふ事。事にか常人
 法うハやうておのの一騎あくぬす。まよふ出さるりくハ必
 供は具してある見たり。金剛ある時。云らハけあより乃
 民ももの財ハおほく。めりやうくとりはく。今より
 いづくへ行て盗せし。しを常人のひびく。我叔父也。
 橋安世といふ者。伊賀の國やんめりとの。あまは。ゆきい
 と。ぬりぬがし。しりし。家。属。者。あてひひつれ。さうに
 たり。おし。今。た。く。さ。り。あ。て。し。を。ん。又。か。の。め。の。と。う。家。も。
 ゆ。さ。う。あ。ら。う。が。〇。て。開。及。び。て。い。か。ー。と。ゆ。せ。る。ハ。お。ん。

おのれも其所をよく存ねば。し。が。ー。こ。に。至。り。て。ひ。る
 乃ほむ。尋ねありき。ゆ。を。あ。り。え。ざる。事。ハ。ま。ま。と。や
 し。之。を。金。剛。少。て。し。れ。あ。ら。べ。ー。い。ぶ。く。か。ー。と。あ。ち
 あり。い。ま。し。く。取。得。あ。そ。ん。と。そ。例。の。お。く。常。人。を。具。し
 出行り。其夜。亥。過。る。は。あ。一。村。ま。至。り。る。に。大。り。門。た。ち。て。
 か。こ。も。ら。に。ハ。竹。の。藪。垣。あ。ら。る。家。あり。金。剛。云。ら。ハ。財。あり。ハ
 ち。も。家。あり。入。て。見。ん。と。そ。見。ま。し。一。な。は。前。一。丈。ざ。り。の。垣
 け。う。て。橋。引。て。あ。ま。ハ。渡。る。ま。し。や。う。し。一。途。割。や。こ。後。より。
 釣。の。や。う。な。物。ま。な。ぐ。綱。つ。き。た。を。と。り。出。る。か。の。竹。の。う。へ
 投。あ。ぐ。れ。竹。の。う。ら。う。釣。か。う。つ。ま。ね。金。剛。も。あ。ら。る。綱。を
 ひ。き。す。す。れ。バ。竹。の。う。ら。う。に。あ。ひ。び。び。く。と。あ。ら。り。と。せ。り。



金剛二郎
常人をつれ
てかたの
まの百姓乃
びあゝ志の
る不

立川集言卷一

しんぎ

竹籠ハ負へて不案内でわたり板橋に渡る所はいづくありと
 すか見れど如法闇夜のおもありはまばあやちもつらひか
 せうけて足も定まらぬとて堀の中へずりつらとあり
 入ぬ衆の内は數十人の若ものども走り出て松うちありて
 のまりのるがとりきておすびと八幡は落たり引出せとく
 らぬやかして人ぞ村きこりてあひあうせ出でて引あげつや
 かていさくろりてとひりまきも柳の樹もあがりつけつさハ一定
 ちんさいぬべしはてもせんかきぬひびきもくしてさきもく
 事と後悔しておろくともりてあむるにあがらぬおぼし
 公卿のてまればはくく見てあやむひびきもあかぬもやつちり
 かとこととりとせしういをあらておひやれとりが若ものども

いりやぬひびきをこもてたきくべき道理をん夜わけを
 かづけしりて底うたれ川よあつちてんかざりよりよく
 心うりて頭をかざれてあまふ番せとのども俄よとやぞ
 けあきて勝ちあはれふりかてとれをけあてた志をた
 の勢あてのとうにあゆもる人あり男どもも頭もくはせ
 とれを人あひひるあはれはあのとこもどや我を殺し
 けりまらるあまらとつあてとあひてとるまは人まらる
 まりて紙燭をりてつくくち争り見ると目もあせせず
 うつむきあはれ出人あをあげておのれは帯人あていあはぬ
 うしりあはれて見つけたれを救えありる橋の安せやり
 あがらつららびてあわけてたはけまらとつ安せあはく

行ひとあつてふゆえんす。よつていふ本心よめりまふやん。
 うれ一た事なりぬ。氣もあらびて。どつは涙ぐむ安せが
 妻代長についで。この持出て常人が斬す。あつたて。あつて
 りて世のつづき。まじ料しや。なまふ。あつて。あつて。あつて
 菌生もいふにゆく。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 られて有あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 は。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 事。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 ちや。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 うち。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 穴。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて

何れど。さにく。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 とり。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 ぼ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 め。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 叔。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 命。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 入。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 出。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 い。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 乃。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて
 心。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて

きつりぬしにりよふまげりる本林の中にて常人こくとよ
 聲ひ入てを金剛二郎がのたごごかこもりに置ておやを
 みてとりだひは無事ととりびて扱いて此皮籠うさび
 取りちて本あひーとよを汝ととりて責まのやむ間皮籠
 を庭のかまよりとまぎれ入ておすつごがをりする
 まがれをよきぬびびとひびごごごごごごごごごごごご
 ておきりとりもさそ皮籠のうさびまきて見らにいさき鎧
 一領不たさぬぐの財も多く入れてあり常人のひひは
 この鎧は我叔父の先祖よりはるる物とてとに大事にやる
 物なりよきにうさそりえ是りといふをれなり皮籠とをた
 人は負を名こそおと出て四五町あゆむ行りるに金剛より

かつて常人をつぐくと見ておのれがよとよのちあげり
 見ゆをさぬりちてきたあやとりといひをさやう乃物
 りちてゆをんがらうとて命ひとりひうひく帰る物と
 して金剛すること大きにちておのれ金剛はよりのを
 たりりりりりんとするや人のよとあは物のありあは
 をちとりあつておひびひのやうりひいできやんやとて
 見せよしりふまぎくよまらととごりてこごつたる袋
 とりぬくをよまらととごりて語りゆせられ身もいれで
 こぶしりて常人があつとつりりちておのれはこに
 かく隠しりて常人があつとつりりちておのれはこに
 ぬをよおのつりりちておのれはこにぬをよおのつりりちて

近江縣物語卷三

十五

いとまきへちりり行る。叔陣はつきて常人心はありひれを
 ぬひびくく物なきにまきりておをりき物こひなり
 高うかき見せてだるふおのれひりきてとりつかる
 而も長おせんいむやく。神崎よ。教のさうごも埋り置
 うりし叔母も人のあれきか。こに行て堀あつてのふ
 りかく我物よせむや。但し皮篋は入て奪ひし。叔父人
 の鎧はあましく乃物よあつどかれおすて出てゆくもやと
 思ひて必とくなりておりる。金剛はさうにんつらず。調伏丸
 かりた行て夜さる。と流ののわてゆりこす。うれひり
 をと思ひて小ぬひびく。眠りさる。いよ。皮篋は
 ひくきて鎧とり出。色よ入る。脊よ負ひて跡をも見

ずしてちりり行る。凡三里をうりきたりる。息まきて術
 かまればおどろい。こえんとてさう見まのせを交なむつ
 置る。あせぐ。ゆり。戸さ。もやけ。引明ておくの方よ
 入ておさうさひておさる。子の刺射おやと思ふ。おも
 てに人のた。おとひ。わねを追きたる。おや。か。陰の
 へ。ま。か。こ。に。ま。ひ。て。眠。さ。か。る。に。さ。い。わ。く。て。男。女。ま。ひ。き
 あひて入る。これいけ。あ。る。に。す。め。山。賤。の。子。の。親。お。ど
 り。め。を。思。ひ。て。ひ。そ。う。に。か。さ。る。ん。と。て。づ。れ。ど。ち。て。ま。か。こ
 り。入。く。ち。の。方。ハ。星。あ。り。に。て。い。さ。う。あ。が。や。う。ち。り。常。人
 め。を。つ。け。て。見。せ。バ。我。よ。お。さ。り。た。る。さ。く。き。男。の。ま。つ。り。泥
 衣。ま。て。さ。り。女。も。む。く。つ。け。く。び。く。の。ち。る。顔。に。い。や。何。ふ。う。あ

らん縁つよ筆成なる物ぬいごひまにうちひいて女おんなあひがれたるお
 きていぬい我われを思おもひてあざむく男おとこあか真加鎮守まかちんじゆの
 神かみをうけてかゝりいせど松山まつやまは波なみうちてほく貝かいの天上てんじやう
 すはとそまわぬいをききて外あそひつらんやこれ見えぬ
 志こころのてつう織オリてかゝつる布ぬいとがふん禪とあつて身みを
 をかきびくきてとらぬい常人つねんたとてゆを念ねんじて少まぬ
 けるがけれも物のほくろりたればやさうをひらてかれが
 りちあつたつものちとをわびて引ひかせて見みればいもが
 あうとゆでりてきこるなり男おとこも女おんなもかこむ物もののひ
 うりてまびる動をいざれをあらび常人つねんたがいと
 くらよれよの高たかくままこれ男おとこづきていざあはは禪

にありといふ人つねんた物ものをきとみて見みればさハ禪
 もてきこる物ものかれよとてかんして手てとやりてはぐり
 よかりなればいもがくらハいふよまつてまはわぬ
 名なやうらひつうりらまよそよ女おんないん籠入いて敷敷
 二十ふたゆでりてきこるのれと七なな喰くりといふ男おとこ
 けれハころそらひたれさそハたなり禪のりていよるあは
 らづつとていりていよるハあもくの葉はハあはれとてい
 して二人ふたりともに着かかたたあつとていよる時ときいさそ
 あやあやあきき白しろひひののそららちちけりて顔かほよあきつ
 ちやうあれれ人ひとままずあかかくくいいつつたた女おんなも男も
 おどろきてあやうあつつていひつつ脱ぬるる衣きぬとりて

逃出^{かたが}るものさうびとあねくあやふれをそとへ^後の
 うくにくたうくうつ^あ足とさうらにあてをちり
 出^い行^いり人^つもつ^ああうちあげけひてさ大^い鏡^い
 うまう^いて神^い崎^いとてそいそきなるかこま至^いりて
 見^いるまふいひはあふまにまてありふあては^い掘^い
 うちあて見^いれた安^い世^いのどく^い財^いもあま^いありそれより
 くづもさる^いあむ^い被^い理^いつづ^いりひておのれあある^いどと
 歳^いてすあひり^いさる^いにても伊^い賀^いの國^いある安^い世^いが^いあ^いる^い
 むづ^いかり^いあ^いれ^いむ^いありて安^い世^いさう^いわ^いる^いや^い
 あひてあ^いれ^いの^いさ^いらひ^いて伊^い賀^いの國^いつ^いら^いる^い
 一^い安^い世^いの^い妻^いを^いの^いさ^いり^いさ^いる^いあ^いり^いる^いと^い年^いあ^い

傳^いり^いま^いて^いの^いさ^いを^い告^いる^いに^い常^い人^いあり^いひ^いら^いる^い今^いか^い
 盜^い賊^いも^いも^いび^いら^いる^い世^いは^い安^い世^いの^い武^い術^いを^い練^いど^いれ
 る^いと^いま^いあ^いる^いや^いま^いく^い通^いゆ^いき^いあ^いん^いや^いさ^いら^いて^い盜^い人^い
 あ^いら^いる^いあ^いづ^いと^いれ^いの^い我^いら^いあ^いら^いる^いま^いい^いら^いる^いひ^いら^いる^い
 て^いひ^いら^いる^いあ^いづ^いて^いあ^いら^いる^いわ^いる^いま^いら^いる^い

近江縣物語卷之三終

